

1. 大学生の特性を活かすヒント - 子どもたちが癒される共感性の高さ(1)

特定非営利活動法人ビーンズふくしま

東日本大震災およびふくしま第一原子力発電所事故による被災によって、大人も子どもも故郷を離れて、先の見通しが持てない状況の中で避難生活をせざるを得ませんでした。

被災した大人自身が自分のことで精一杯になっている中で、子どもに関わったのは、学習支援や遊びなどを提供した、福島大学などの地元学生ボランティアの力でした。震災の影響で大学自体の講義の開始が遅れる事態でしたが、その間の時間を使って、精力的に大学生ボランティアが避難所を訪問していました。



2011年8月避難所のボランティアをする福島大学の学生



9月より仮設住宅に場を移してボランティア再開

避難所から、仮設住宅へと避難者の生活の場が移っていくにつれ、子どもたちは再びバラバラになり、その生活の状況を掴むことが困難になっていきました。それに伴い、ボランティアを希望する学生と子どものミスマッチなどもおこるようになってきました。

ボランティアをする上でも、どこで展開すればニーズとマッチした効果的な支援ができるのか。移り変わる避難者の状況を的確に捉え、行政や仮設住宅自治会との関係調整もしながら、多地域で活動を展開する上で、NPOと大学、学生ボランティアの連携はそれぞれの強みを活かす効果的な連携となりました。

1. 大学生の特性を活かすヒント - 子どもたちが癒される共感性の高さ(2)

特定非営利活動法人ビーンズふくしま

ボランティアのマッチングの課題が解決され、活動場所の目途がつくと、ここから先は大学生の行動力と子どもとの関わり力の本領を発揮。子どもがいる仮設住宅を巡回しての支援や6班体制で6か所の仮設住宅の定期訪問を開始しました。



活動場所の仮設住宅集会所
おやつを食べながらお話タイム



大学生のお兄さんお姉さんはい
つも話を聞いてくれます。



笹谷東部仮設住宅にて
久しぶりの外遊び

親でも先生でもない存在。優しく、楽しいことをたくさん知っていて、思いっきり一緒に遊んでくれる。毎週の大学生の訪問を子どもたちは心待ちにしてくれていました。

宿題が終わった後は、遊びの時間。工作をしたり外で遊んだり、大学生が考えてきたものや、子どもたちがやってみたいことなどが展開されました。土曜日の午後の時間はあっという間に過ぎていきます。「楽しかった。」「また来てね。」「今度は～したい。」など、毎回集める子どもたちの感想からも、大事な時間になっていることが見えます。